

HSC017-01

会場: 202

時間: 5月24日13:45-14:00

## 農村空間の商品化による地域振興の可能性－富山県黒部川扇状地を事例として－

### Possibility of regional development owing to the commodification of rural spaces: the case of the Kurobe alluvial fan

田林 明<sup>1\*</sup>

Akira Tabayashi<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup>筑波大学

<sup>1</sup>University of Tsukuba

日本を含む先進国では、これまで基本的に農業生産の場とみなされてきた農村が、農業生産のみならず、余暇や癒し、そして社会的・文化的・教育的価値、環境保全などの機能をもつ場として捉えられることが多くなった。現代の農村空間は、生産空間としての性格が相対的に低下し、消費空間という性格が強くなってきている。この状況を「農村空間の商品化」と捉えることができる。この報告は、日本において農村空間の商品化によって地域振興が実現される可能性を、観光的要素の拡大に注目して検討する。事例地域として、富山県黒部川扇状地の農村を取り上げる。

黒部川扇状地において学習観光や体験観光といった視点から農村空間の商品化を考える場合、自然的観光資源としては、海岸侵食や海底林、海岸砂丘、三角州、沢杉、扇状地地形、旧扇状地、段丘崖、散村景観、黒部川の川相など、地元住民が見過ごしている日常的な自然現象が、外部者にとって極めて貴重な観光資源となる可能性がある。これらの自然基盤の上に築かれた人間による構築物もまた、人文観光資源となりうる。黒部川の治水のための霞堤や旧堤防、様々な形の水制、そして水神社、利水のための愛本堰堤、合口用水路、幹線・支線・末端用水路、河川敷の公園緑地、さらには農産物の栽培景観、コシヒカリや黒部スイカ、チューリップ球根、日本酒なども観光資源となりうる。北陸道のかつての宿場町の景観、観光資源とみなされてこなかった史跡や風力発電所などにも注目しなければならない。

これらの農村空間の商品化によって発見された新しい観光資源と、既存の観光資源を結びつけることによって、観光資源が線的・面的な広がりをもつようになり、より充実した観光を実現できる可能性がでてくる。しかし、黒部川扇状地では観光によって地域振興をはかることには限界がある。むしろ、住民が自分たちの身近な自然や景観、生活形態、文化などに関心を持ち、調査探求し、その存在価値を認識し、誇りをもつことによって、社会教育あるいは生涯教育の推進を図るべきではないかと考えられる。これに関して注目されるのは、黒部川扇状地を中心としたフィールドミュージアム「水博物館」構想である。黒部川流域にある様々な水に関する素材を、水博物館の展示物と位置づけ、現地において見学と体験をできるようにするもので、これによって水や水循環の保護と保全を働きかけ、地域社会全体の持続的発展をめざそうとしている。この構想は、山形県朝日町などに代表されるエコミュージアム活動に通ずるものである。黒部川扇状地とその周辺では、まず地域住民を念頭においた農村空間の商品化が進められるべきであり、住民は農村空間の商品化によって見いだされた地域資源や遺産の学習と理解を通じて、地域づくりを考えるべきである。それが外部の人々を引きつけ、観光振興に結びつくという可能性は小さくない。

キーワード:商品化,農村空間,地域振興,観光,黒部川扇状地

Keywords: commodification, rural space, regional development, tourism, Kuorbe Alluvial Fan